

○相国寺光源院所藏文書

二三 惟高妙安置文

大谷保国寺開山桂昌院殿也、靈光院殿御母儀也、其時之相公者鹿苑院殿御代貳百年余也、友野一揆之時小鴨

(職)

依別心同名村上跡識為闕所金屋三百石之内貳百石自靈光院桂昌院殿仁御寄附百石分西伯耆片山被遣之、右、大谷保国寺之儀、養素院殿御代為広徳軒領先師瀑岩仁御寄附、其後高尾卅五石高源寺殿瀑岩仁御寄附、又其後栖庵分、蔵光分貳名寿福院殿其仁御寄附其後国分寺、四王寺兩所瑞仙寺殿某仁御寄附也、

右

(一五四九)

天文拾八年六月九日

妙安(花押)

二四 足利義昭御内書

伯州光源院領所々事、近年無寺納由候、彼院之儀、先
代位牌所之間、急度可申付候者、可為喜悅候、毛利父
子かたへも申遣候、猶信恵、藤長可申候也、

(義昭)

六月朔日

(花押)

(宗勝)

南条豊後入道とのへ

二五 毛利輝元書狀

(義輝)

京都光源院末寺保国寺領所之事、住持有下向、先公方
様御自筆帶御寄附之狀、御愁訴候、定雖可有于他候、
既先御代御位牌所之儀候之条、有御分別、御還補之
段、尤可然候、為其一筆申入候、猶從元春可被申候、
恐々謹言、

正月廿日

輝元(花押)

(宗勝)

南条豊後入道殿

御宿所

二六 吉川元春書狀

就光源院御領之儀、被對輝元、被成御内書候、至御方
も同前之儀候、御面目之至候、彼御院之儀、先義輝公
被補直御位牌所、当国之内保国寺并所々之事、既以御
自筆被成御寄附訖、然処、近年依其国錯乱、旁以御院
納無其沙汰之故、御院及退轉之由、被仰下候、太以歎
敷儀候、誠雖御不屑千万之儀候、被成下御内書上者、
且御冥加、且輝元我等別而可得御扶助候条、有御校
量、御還補候者、可為本望候、猶彼院主可被仰理候、
我等心底之儀者、委細小寺并此者可申述候、恐々謹
言、

卯月廿日

元春（花押）

（宗勝）

南条豊後入道殿

御宿所

二七 吉川元春書狀

(宗勝)

伯州大谷保国寺之儀、数年蒙仰対南条豊後守度々雖申聞候、致拘惜之于今不相調候歟、然者、当時南条対芸州相逆意之条、退治申付候、就其重畳被仰聞旨令承知候、彼一寺之儀可被進置之条可被成御進止事肝要候、猶御使僧可有御演說候、恐惶謹言、

八月廿六日 元春（花押）

拝覆 光源院

尊答

二八 黒田孝高書状案

御状拝見候

(州)

一 相国寺御領之儀、東伯弼ニ有之由、被仰越候、菟角

(蜂須賀正勝)

秀吉様御意次第第二如在有間敷候、彦右へ懇ニ申渡候、

一 姫路へ之御供ニ候者、此地可有御出と存候処ニ、無其儀御残多由、各々被申候、御書中通申由ニ候、

一 安国寺去晦 日ニ下国候、此比可有御上候間、随分急明隙 可罷上候、

一 若相滞儀候ハ、不斗御下向待申候、

一 藤四郎様へ之御事、諸辺御機遣不及申候へ共、頼存候、恐々謹言、

(黒田孝高)

黒官兵在判

(天正十一年)

十一月十二日

道薫様

参御報

二九 蜂須賀正勝書状

(直秀)

猶々、御寺領之事、南条殿へ涯分可申理候、又淡路殿御言伝申入度存候、乍恐御伝達頼入申候、此方も

(州) (州)

備中・作劔・伯劔三ヶ国之事候間、逗留可行と迷惑いたし候、切々可得貴慮之候、以上。

(州)

伯劔御寺領之儀、道薫公を以、秀吉へ被仰理由候、尤、令満足候、近日南条殿帰国之事候間、從秀吉之御使者二能々申含可遣之候、於拙子少も不可存疎略候、南条殿も秀吉公之御意候事候者、不可有異儀候、仍志

(反)

ゝら老端被懸御意候、過当至極候、此方年内中可致逗留候御用之儀者可被仰越候、道薫様へも同事二申上候、恐惶謹言、

蜂彦右衛門尉

(天正十一年)

十一月十二日

正勝(花押)

光源院様

参尊報

三〇 蜂須賀正勝書状

(王力)

尚々、三ヶ所之事、大谷・国分寺・四玉寺、此所々
秀吉公堅我等召被申、早々被引越候様との御錠候
間、其分御心得尤候、込も御意候事候間、可被及異
儀事無之候、早々被成御請、御祝著候様、御返事伺
申候、申候、

当表之儀、所々被任御存分、秀吉公至大坂被納御馬
候、各事、濃州境目二千令居陣候、五三日中二勢州
へ御人数被出候歟、無左候者、可被打入候条、可御心
安候、先日八橋之事、具申入候、其分可有御心得候、
仍貴殿様之被下置候三郡之内二度々申候キ相国寺光源
院領数ヶ所へハ三ヶ所ニ被書付、秀吉公へ御申高頭三
ヶ寺由申候、此段ハ秀吉公へも御のそき候て尤之由、
被思召候、我等ニ被仰付候間、此分ハ早々被相渡候
て、只今申候光源院御下代之坊主、被納候様可被仰付
候、此段何かと被仰候者、何敷候、遠路之事候間、手
間被入間敷候、恐惶謹言、

(天正十二年)

七月七日

蜂彦右衛門尉

南勘兵衛様

正勝判

参人々御中

三一 南条直秀書狀

從光源院之御使僧、此中爰元御逗留候、只今御上国候之間、令啓書候、御知行在所之儀付、先度被仰越候存其旨大谷村引渡申候処、八月以来四王寺分所務被作候之間、当年之儀八四王寺分可有御所務之由二候、何分にも彼方次第二仕候、委曲此方任口上候、恐惶謹言、

南勘兵

直秀（花押）

十一月廿四日

蜂彦右様

人々御中

三二 南条直秀書狀

猶々、於向後者、別而可得御意候、於拙者も、相応
之御用等被仰付、不可存疎意候、以上、
尊書致拝聞候、仍而御知行方之儀付而、御使僧被差下
候、即引渡申、当務分仰付候条可御心安候、随而為御
音信、板物三ツ被懸御意候、過当之至忝存候、尚以御
使僧へ申入候条、不能審候、恐惶謹言、

(南勘兵衛)

十一月廿五日

直秀(花押)

光源院

参尊報